

ウズベキスタンという国

国内・国際情勢と日本との関係

楠本 祐一



ウズベキスタンという国

国内・国際情勢と日本との関係

楠本祐一

名古屋大学法政国際教育協力研究センター

目次



1. ウズベキスタンの一般的国情	8
2. ウズベキスタンの内政（経済自由化、民主化）	11
3. ウズベキスタンをめぐる国際関係	16
4. 日本の対ウズベキスタン政策	21
5. 小泉首相のウズベキスタン訪問	29
6. ウズベキスタンで思うこと、考えること	31



(出典：<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/uzbekistan/index.html>)

本書は、2006年10月12日に名古屋大学大学院法学研究科において行われた講演記録である。

○司会 松浦好治・名古屋大学大学院法学研究科長

楠本祐一・ウズベキスタン大使が日本に一時帰国されておられます。名古屋大学はいろいろウズベキスタンで活動しておりますが、駐ウズベキスタン日本大使館には支援をいただいております。せっかくの機会なので、楠本大使には、ウズベキスタンについてお話をいただきたいと思います。

簡単に楠本祐一大使のご略歴を紹介させていただきますと、大学卒業後、外務省にお入りになりまして、情報文化局等を経て、クウェート大使館、ジュネーブ、ハバロフスクの総領事、それから現在はウズベキスタンの大使をおつとめでございます。

それでは、早速でございますけれども、お話をいただきたいと思います。

○楠本祐一・ウズベキスタン大使

本日は、こういう機会を与えていただきまして本当にありがとうございます。

私は、ウズベキスタンに参りましてちょうど2年が経ちました。以前から名古屋大学とタシケント法科大学のプロジェクトは極めてうまくいっておりまして、今日平野総長にも申し上げたのですが、いろいろな方に日本とウズベキスタンの協力関係の大きなサクセスストーリーの1つとして紹介をしております。ぜひ日本に帰国する機会があれば、そのお礼と、引き続きご支援を直接お願いしたいと思っております、まさに今日そういう機会が与えられたことについて、本当にありがたく思っております。

先ほど、平野総長より今後のプロジェクトについてもお伺いをいたしましたし、名古屋大学とタシケント法科大学の協力、さらに今後、引き続き拡大をしていこうという力強いお話をお伺いいたしましたので、タシケントに戻

った後、早速、タシケント法科大学のルスタンバエフ学長とも話しまして、名古屋大学とのプロジェクトをより効果的に実施することを引き続き真剣にフォローさせていただきたいと思っております。

今日はこういう機会でございますので、着任後ちょうど2年が経過いたしましたので、現時点で私がみていますウズベキスタンの状況について、それから私が外務省に入って30年ぐらい経ち、いろんなところに勤務してまいりまして、外から見た日本、特にウズベキスタンにいて感じることをお話ししたいと思う次第でございます。

1. ウズベキスタンの一般的国情

ウズベキスタンの国情について述べますと、第一点目は、極めて親日的です。私もいろいろな国に勤務してきましたけれども、ウズベキスタンほど日本大使として大歓迎で迎えられた国というのは初めてでした。ちょうど2年前ですけれども、私が着任をしたその翌日に外務大臣が会ってくれまして、信任状のコピーを伝達しました。またウズベキスタンで大使が招かれる行事がいろいろありますけれども、先約があってお断りしたりすると外務省から電話がかかってくるんですね。「日本の大使が来ないと困ります」と言われるんです。それぐらいいつも大歓迎をしてくれています。それからたしか着任後10日位だったですか、カリモフ大統領に信任状を捧呈しました。これも例外的に早くて、最近着任した大使の中には4ヵ月とか5ヵ月待たされる大使もいます。ですから、やはり日本大使は特別だということでした。

それから、大統領に信任状を捧呈した時に、あと2人だけで別席で話すんですね。儀典長から「大体15分ぐらいですよ」という話を聞いていまして、私はロシア語を話しますので、大統領と通訳なしで話をしました。何と1時間半、それも大統領の方から、いかに日本というのはすばらしい国で、自分はいいい印象を持っている、日本との関係を深めたいというお話がありました。ちょうど私と同じ日に信任状を捧呈した大使が3人いましたが、大体皆さん10分とか15分でした。私の後の大使が延々と1時間半待たされ「何をしゃべっていたんだ」と言うぐらい、そのぐらい日本への親近感をひしひしと感

じました。

これは大統領が直接私に言われた言葉ですけれども、「ウズベキスタンというのは明確にアジアなんだ。そしてまた日本はアジアのリーダーである。ですから我々として一番勉強したい、見習いたい国は日本である」とのことです。またその後いろいろな経験を踏まえても、相当やはり真剣にウズベキスタンは日本の方を向いている。それからアジアというと韓国も中国もあるんですけれども、やはりその中でも特に学ぶべきは日本という意識が強い。これは大事にすべき点だというふうに思っている次第です。

第二点目は、ウズベキスタンという国は、特に現政権のもとでは、治安、安全保障の確保、これに極めて神経質になっています。実際、アフガニスタンとは国境を接しておりますし、アフガンの状況は最近、どちらかといいますと南の方が悪くなっている状況で、アルカイダもまだ残っている、タリバンも残っているということで、アフガニスタンから宗教的な過激派、それから麻薬、これが入って来ます。実際、ウズベキスタンの中でも、99年に大統領の暗殺未遂事件があり、それからタシケントで自爆事件がありました。それから今年の5月、これは日本でも大きく報道されましたけれども、アンデジャンというところで暴動事件が起きたということがあって、やはりウズベキスタンの現政権のもとでは国の治安、それから安全保障、安定、これを何とか確保しなければならないという考え方が極めて強いのです。国を開いて自由化をする必要がある、民主化する必要があることはわかっているんですが、それとともに治安、安全保障の確保をどうするのか、これに極めて神経質になっているという感じがいたします。またそのことが今、特に欧米といろいろ対立の原因になっていると感じております。

第三点目は、自主独立心が極めて強いことです。これはウズベキスタンの

置かれた地理的状况をご覧になると、ロシア、中国、アメリカ、EU、さらには南からインドもあるし、一時はトルコもこの辺は同じ民族ということで影響を及ぼそうとしましたし、それからイスラム関係でイランとかアラブ諸国があります。そういう中でいかに独立を確保するか、そしてその中でいかにウズベクの自主独立を保つかということに極めて大きな関心を払っているということです。いい意味では自主独立ですけれども、他方、中華思想的なところもありまして、やっぱり中央アジアの中の一番のセンターなんだというような意識があります。どの国の歴史・文化よりも一段高い、どの国の影響にも入らないという、そういう意識が強いということです。この辺、うまくそういうセンシビリティを理解して交流していかないと、反発を受けます。その観点から、どうもアメリカ、ヨーロッパのやり方というのは、押しつけがましい、欧米の方が上だ、ウズベクは劣っているとの立場から、上から下に教えようとする、そういうスタンスは受け入れられないと思われるようです。そもそも欧米はキリスト教に基づいた文化だ、我々はイスラムの文化だということですから、対立が生じやすいということかと思います。

2. ウズベキスタンの内政（経済自由化、民主化）

9月1日が独立記念日で、毎年式典があるんですけども、今年は独立して15年、国としてはまだ新しいということでもあります。今、ウズベキスタンの中で大きな課題というのは、経済構造改革です。長年ソ連の体制のもとにあって、いわゆる統制計画経済、これを自由化しなければならない、市場経済化しなければならないということです。

特にウズベキスタンにとって重要な経済分野というのはやはり農業です。綿花は世界第2位の輸出国ですし、それから小麦も自給できるということですし、マユも生産しているということですが、なかなかそれが付加価値をつけた工業製品になりません。綿花は綿花そのまま外に輸出している。マユはマユでそのまま輸出しているということで、早く新しい市場経済マインドを持った農業セクターをつくっていかなければならない。

しかし、いまだにソ連のころのソフホーズ、コルホーズの体制からなかなかうまく市場経済の方に移行しないというのが、一つの大きな課題ではないかと思います。

それから、まだまだ国営企業がたくさん残っております。一部、民営化したけれども、ほとんどまだ国が支配しているという状況で、もっともっと民営化のプロセスを進めなければならない。そして、中小企業を育てなければ

ならないということです。私も現地の新聞報道をフォローしていますが、今の政府も問題意識は持っているのではないかと思います。そして具体的には、大統領令とかいろいろな分野で新しい施策を講じられているという努力は認められますし、ウズベク議会でもいろいろな論争がされていると報道されています。問題意識はあるのですけれども、なかなか経済改革が実効性を上げていない、経済改革が遅れているという点が問題だと思います。

それからもう一つの課題は、民主化をもっと進めていかなければならないことです。ソ連のもとでは、共産党独裁だったわけですから、政治的自由、いわゆる表現の自由、人権というのは、どちらかという制限的でした。現状では上院・下院の2院制の議会もありますし、それから政党も今のところ5つあります。そして議会の選挙も行っています。そしてプレスについても、検閲はないということになっています。

ただ、この民主化についても、まだまだ一般的な意味での民主化の域に達していないということで、特に欧米からは批判があります。議会にしても、政党にしても、プレスにしても、一応、システムとしては整っているけれども、実際の政府批判というのはできないという枠のはまった自由化という点があると思います。

ただ、政府としての問題意識は、民主化を進めていくというものです。我々もウズベキスタンの政府の関係者と人権問題も議論することがありますし、民主化のことも議論することもあります。これに関しては、一切反論はありません。ウズベキスタンも民主国家になるのだということはおっしゃっていますが、その進め方については、やはり遅れているのが現状です。その背景には、ウズベキスタンの内政面での改革の進め方というのは漸進主義、少しずつ、それからウズベク流でやっていくということです。これは先ほど申し

上げた自主独立心が極めて強いということですから、ほかの例はもちろん参考にはするけれども、ウズベクのことは自分でやるのだという、そういう意識が強い。それと、ウズベキスタンの置かれた政治的、外交的な状況が極めて不安定であり、経済改革の要求、民主化の要求と国の安定、独立をどう図るのかということが、トレードオフの関係になっているということです。その辺、よく言われていますけれども、ウズベクのやり方としては、新しい家が建つまでは古い家はつぶさないということです。他方、古い家があるとなかなか新しい家が建たないということもあって、その辺が難しいところだと思います。

特に経済改革の遅れというのは、これは何とかしなければならないと思います。というのは、貧困がなかなか解決しない。1人当たりのGDPは、今、ウズベキスタンがまだ500ドルにいかないのですが、カザフスタンは2,000ドルを超して3,000ドルに達しようとしている。ロシアは、もっとどんどん進んでいる。隣のタジキスタンも、最近経済をどんどん開いています。そういうことで、近隣の国がどんどんよくなるのに、ウズベキスタンはいまだに所得が増えない。実際、月の所得が平均して40ドルっていません。学校の先生は特に悪くて、20ドル～30ドルです。今、タシケントで生活するには1ヵ月160ドルぐらい要と言われてますから、そんな40ドルで生活できないということで皆さんアルバイトをされているのでしょね。そういう状況ですから、公務員もなかなか生活できないということなので、汚職構造がなかなかなくなる。

それからもっと重要なのは、ウズベキスタンの人口の60%が25歳以下ということで、若者の国です。そして彼らは教育にもものすごく熱心ですから、毎年毎年大学生がどんどん卒業していく。しかし職がないということで失業

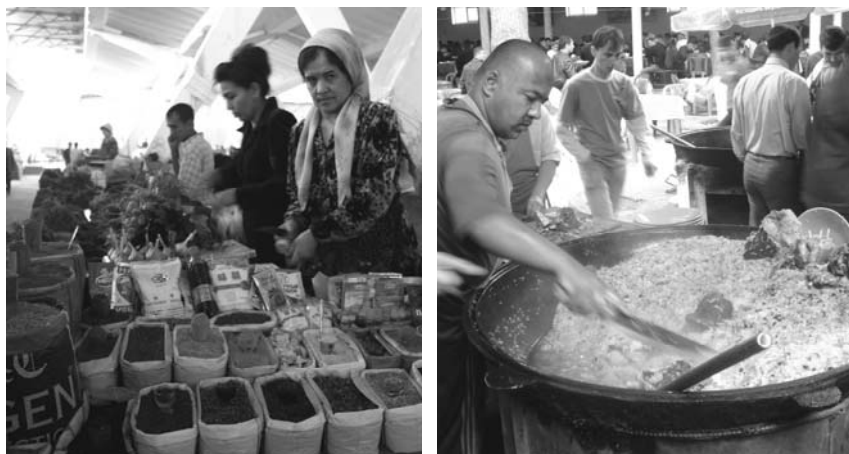
です。これは政府の関係者も言われていますが、今、ウズベキスタンにとって一番重要な課題は何かというと、若者に職を与えることです。

経済改革が全く進んでない、無視しているということではなく、一生懸命しなければならないということですが、それを実施する過程においては、カザフスタンとかロシアのように思い切ったことはやらない。少しずつということですから、既存の特権グループの存在もありますから、なかなか動かないという不満がたまるという点があると思います。

でも現地にいまして、その辺はより客観的に見る必要があるのではないかという感じがします。欧米の一部にありますように、ウズベキスタンはほんでもない強権独裁体制であって一般人民はその強権の中で呻吟しているという見方、これもちょっといき過ぎではないかという感じがしますし、かといって他方、経済改革、民主化がどんどん進んでいるということでもないですから、やはりその辺、日本としては客観的に情勢を分析しながら、ウズベキスタンが早く旧ソ連の体制から離れて、実質的に自由主義経済、市場経済化、あるいは民主的になるための効果的な援助をしていくという対応が必要ではないかと思うわけでございます。

内政面で、今一番注目しておりますのが、カリモフ大統領の任期が 2007 年の 1 月で切れ、カリモフ大統領の後の体制がどうなるのかということがあります。今のところ、法律によると、2007 年 1 月に大統領の任期が切れたその年の 12 月に大統領選挙をする。それまでは今の政権が暫定的に続くということなんです。今のところ、大勢の見方としては、有力な後継者も見当たらないということなので、何らかの形で今の体制がここしばらくは続いていく、再選になるんじゃないかということです。ただ、憲法によりますと 3 選禁止ということになっていまして、既にカリモフ大統領は 2 選されている。それ

から、選挙をするにもどういう形の選挙をするのか。今、選挙といいますと、国際選挙オブザーバーが来ますし、どれだけ公正な選挙ができるかとか、これからいろいろ新しい動きが出てくるかと思います。



市場の風景

3. ウズベキスタンをめぐる国際関係

ウズベキスタンに陰に陽に影響力のある国というのは、やはり何と云ってもロシアです。それと中国が、エネルギーを中心に最近とみに中央アジアの各国を支援している。それにアメリカがロシア、中国への対抗意識もあり、またアフガン情勢がまだまだ不安定なので何とかプレゼンスを確保しようとしています。またEU（欧州連合）も影響力を確保したいと考えているようです。ロシア、中国、アメリカ、EUが何となく、グレート・ゲームというわけではないですが、様子を伺っている状況です。

その中であって、やはりロシアとの関係、これはやはり切っても切れないというか、ソ連の長い影響もありますし、それからまだまだ旧ソ連的な体制が残っていますし、言葉もロシア語ですし、メンタリティーも旧ソ連的なところが残っているということで、ロシアとの関係が続いている。かつ、アンデジャン事件の後、やはり国の安全保障を確保するには欧米ではなくてロシアではないかということで、ロシアと同盟関係条約というのを新たに結びました。そしてまたCIS集団安全保障機構にウズベキスタンが復帰し、どちらかという安全保障の分野ではロシアとの関係を強化する方向にあるかと思えます。それから経済面でも、なかなか欧米の企業が進出しにくい関係になって、経済的にもロシアとの関係が進展しつつあると言えるかと思えます。

しかしながら、一方的にどんどんロシアに傾斜しているかということ、そうでもないようです。自主独立心というのは残っていますので、その辺、ロシ

アとの関係についても、ウズベキスタンの国益を十分に考えながら、譲るべきところは譲るけれども、守るところは守ろうという、そういうしっかりした路線は保持しているようです。

それから中国との関係については、中国は経済面でエネルギーに関心を持っているし、それから中国の産品を輸出したいようですけれども、カザフスタンとかキルギスに比べると、まだまだ中国はウズベキスタンに入れない。やはりこれも中国に対する警戒心が大きい感じがします。ウズベキスタンは漸進主義で、輸出代替産業を育てていくということですから、経済の門戸を開けると中国がどーっと入ってくるんじゃないかという恐れもあるので、中国との関係がどんどん進むというわけではないように思われます。他方、最近、タシケントのスーパーマーケットに行きますと、やはり中国産品が少しずつですけれども増えているという感じがします。

それからアメリカ、EU の関係は、アンデジャン事件の後、急激に冷却化いたしました。特にアメリカとの関係については、ウズベキスタンの現政権は、グルジアから始まってウクライナ、キルギス、それからアンデジャン事件へと至る「革命」の背景には、やはりアメリカが絡んでいるのではないかという、猜疑心、警戒心を有しており、アメリカとの信頼関係がなくなったことが大きな原因だと思います。

ですから昨年、上海協力機構の決議に従ってウズベキスタンに駐留していた米軍は撤退しましたし、経済協力もなかなかうまくいかない。それから名古屋大学とタシケント法科大学の交流は成果が上がっていますけれども、学生はアメリカになかなか行きにくいという状況です。

それから、EU の中でも特にイギリスとの関係があまりよくない。イギリスは、以前からウズベキスタンにおける人権状況が悪いと強く批判していま

すし、アンデジャン事件をめぐるでも、イギリスが一番初めに対ウズベク非難をしたとして、イギリスとの関係がよろしくない。

一方、ドイツは対話路線ということで、ウズベキスタンの関係者の話を聞きましても、東の日本と西のドイツ、これは信頼していいというような気持ちでいるようです。ただ、ドイツの場合はEUの一員ですから、ほかのEUメンバー国の意向を無視できません。実際、EUは今、アンデジャンの事件でまだ制裁をやっており、今後、制裁を継続するのか否かが大きな問題です。ドイツはどちらかというウズベキスタンを含む中央アジアとの関係、対話を進めたいということですが、ほかのEU諸国は、アンデジャン事件の結末をはっきりさせなければならないということを言っていますので、EUはどういう動きになるか注目されます。

アメリカとの関係はよろしくないのですが、アメリカ側もウズベク側も、決定的に関係を悪くすることはしないように、何となく信号を送りながら、少しずつ対話の窓口を探っているという感じがします。最近、アメリカのパウチャー国務次官補がウズベキスタンを訪問されて、カリモフ大統領と2時間半話しました。次官補というのは局長レベルなんですが、局長レベルにわざわざカリモフ大統領が会ったということ自体ちょっと異例なのに、2時間半も会談したということはウズベク側も何とかアメリカとの関係をつなぎたい。それからアメリカも、ウズベキスタンはやはり中央アジアでは大国ですから、何とかウズベキスタンとの関係を探りたいということです。やはりお互いにメンツがありますから、超大国と中華思想の強い国ですから、どちらかが頭を下げるのかというと、その辺がなかなか難しいところがあります。

現政権は、アメリカ、EU とつきあうことの重要性を十分にわかっていると思いますし、ロシア、中国との関係のみならずアメリカ、EU との関係も、

そのうち何らかの契機があれば改善されるという感じがしますが、とりあえずは今のところ低調です。

また、中央アジア諸国との関係ですけれども、カザフ、キルギス、タジク、トルクメニスタンとありますけれども、地域協力が大切ということについては、総論賛成です。同じ文化、同じ言葉（タジクはイラン系と言われていすけれども）を持った国々ですから、何となく一体意識は共有されており、地域協力を進めることは大事ということについては異論ありません。ウズベクも中央アジア共同市場をつくろうというスローガンを掲げているし、カザフスタンは中央アジアの国家連合をつくろうとか、スローガンはいろいろあります。ただ、現実を見ますと、この5カ国は経済的にずいぶん差があります。そして国の規模もずいぶん違います。人口面では、ウズベキスタンが2,600万で最大です。キルギスは500万です。国の規模も違いますし、それから経済的な基盤もずいぶん違います。それから治安状況、ウズベキスタンはテロリストに対して、極めて厳格な国境警備もやっていますけれども、ウズベキスタンの目から見るとキルギスとかタジクはいいかげんだとなります。なかなか総論賛成でも、各論で何かを協議するかという話になると、なかなかうまくいかない。特にウズベキスタンとカザフスタンというのは、強烈なライバル意識があります。私はタジキスタンも管轄しているのでときどきタジキスタンに行きますけれども、タジクに行くと、ウズベクというのは大国意識が強くてとんでもない国だという話もあります。それからトルクメニスタンは、ちょっと風変わりな国です。しかしながら、少しずつではありますけれども、中央アジア諸国はばらばらではだめだ、まとまらなきゃだめだという意識はあるのではないかと思います。

そういう中央アジア地域協力のベースを踏まえて、日本が始めた「中央ア

ジア+日本」対話があります。この地域協力対話は、日本がそれぞれの国との二国間関係を進めつつ、中央アジア全体の地域協力を支援しようということです。これに対しては各国とも地域協力を賛成ということですから、少しずつ中央アジア諸国との難しい関係を打開しながら地域協力を支援していく、そのお膳立てをしてあげるといことは、私は極めて重要な日本の役割だというふうに思います。今、アメリカ、EUがそれをしようと思ってもできないわけですし、ロシア、中国が出てくると彼らは警戒するということになると、中央アジア諸国を念頭においた地域協力というのは、日本しかできないのではないかと思います。そしてウズベキスタンをはじめ中央アジア諸国の側からも日本の役割について要望がありますから、是非これはやるべきだと思っております。

4. 日本の対ウズベキスタン政策

次に日本としてウズベキスタンに対して何をすべきかということについて述べたいと思います。

わが国とウズベキスタンとの関係、これは1993年に在ウズベク日本大使館がオープンをいたしまして実質始まったわけですが、国交が始まって以来、現在に至るまで、我が国とウズベキスタンとの関係で一番重要なのは、いかに効果的に経済協力を進めていくかだと思います。日本の経済協力の目的は、ウズベキスタンの経済改革、自由化、市場経済化を支援していく、そして民主化をもっともっと進めていく、ウズベキスタンが真の民主国家になるように、そして人権の問題も含めて、ウズベキスタンがほかの国から後ろ指を差されることがないように、そういう支援をしてあげることが、当面大きな日本の課題だと思います。

実際のところ、ウズベキスタンとの関係が始まって今日に至るまで、日本の援助額が総額で約1,200億円と言われております。中央アジアの諸国の中ではウズベキスタンが我が国援助の最大の受入国です。そして約1,200億円のうち、約900億円ぐらいは低利でお金を貸す円借款です。そのほか医療、教育関係とかのプロジェクトに対する無償資金供与、それからJICAが中心になっている技術協力です。円借、無償、技術協力、この3本柱でやっています。

今後、今までの実績を踏まえてやるべき分野として、経済改革、民主化の支援が重要かと思いますが、その中で今、我々として重要視しておりますのは、これはまさに名古屋大学が関与いただいている法整備支援であります。

日本も明治のころ一番初め、一生懸命やった近代化努力の一つが法整備でした。有名な話で、欧米からたくさんの方を呼んで法整備から始めたということですから、やはり法整備支援がないと民主化の確保とか、あるいは経済関係、ビジネス、いろいろな発展がなかなかできないということです。これはウズベキスタンもよく理解していることだと思いますので、私は改革支援の中の法整備支援というのは是非とも名古屋大学のご参画をいただいて積極的に進めていくべきだと思っております。

そのほか、JICAのラインでは、農業関係、あるいは中小企業支援、金融支援等、いろいろな分野の改革支援を引き続き進めていくべきだと思っています。

それから、経済協力の分野で改革支援とともに重要なのは、人材育成です。ウズベキスタンは、人口の60%が25歳以下ということですから、引き続き留学生の受入れを進めたいと考えています。名古屋大学も多数のウズベキスタン留学生を受け入れていただいていることをありがたく思っています。それからJICAによる研修員の受け入れです。今後とも将来を背負って立つ優秀な人材を育成していく必要があります。

ウズベキスタンも教育には格別の配慮をしております、ウズベキスタンの関係者からよく聞くのですけれども、国家予算の4割程度が教育に関するものだそうです。私もウズベク国内を回りましたが、大学とかカレッジの建物は随分立派です。いろいろな方の話とかを総合しますと、ハード面はいいのですが、ソフト面でまだまだキャッチアップできていない。それはそうだと思います。まだ独立して15年ですから。特に法律もそうだと思います。今後、法律面では名古屋大学の支援を是非ともお願いをしたいと思います。

それから、人材育成とともに力を入れているのが、社会セクターの支援です。タシケントではそれほど感じられないのですが、地方に行きますと貧困と失業が問題となっており、住民の生活環境を改善することを目的にした草の根支援を行っています。どういうものかという、地方の小さな病院にいろいろ医療機材を供与したり、地方の小さな小学校とか保育園に机とかいろいろな施設設備を支援しています。それから円借款という大きな話になると、経済インフラの支援です。これまで鉄道、空港、通信、発電所等への支援を行っています。将来のウズベク経済が発展する足腰を強化するという支援が必要だということです。

ほかの国の支援に比べて、日本の支援というのは、これは格段に高い評価を受けているということを書いていいと思いますし、ウズベク側が格段の謝意を示しているということが言えると思います。

日本の援助というのは、まず相手方の意向を十分に聞く、何が必要かということをもまず相手方と十分に話し合う。そしてこれは名古屋大学のプロジェクトもそうですけれども、具体的なプロジェクトを組む前に相手側の意向を十分に尊重しながら、話し合いで何をするかを決めていく。そして実施についても、必ず相手方と協力してやっていく。名古屋大学もそうですし、JICAもそうです。そういうアプローチが、ウズベク側にとって極めて受け入れやすい。我々を大事にしてくれる。我々の考え方を大事にしてくれると受け止められている側面があります。

それに対して、欧米のアプローチというのは、優れたものから劣ったものに教えてやるというアプローチの感じがするとよく言われています。またアメリカなりヨーロッパの考え方、あるいはその背景のキリスト教の押しつけと受けとめられているほか、人権とか民主化の面でいろいろ欧米との軋轢が

あり、欧米の援助を受けると、ギブ・アンド・テイクでこれをやるからにはあれをやれというアプローチが取られる。こういうアプローチは内政干渉だとして反発を招いているようです。

ただ、日本側の援助も全く無制限というわけではなくて、我々としても、場合に応じて「日本の援助というのは、まさにウズベク側の経済改革、自由化、民主化のためにやっているんですよ」ということをいつも言っている。欧米が誤解をしないように、我々としても配慮しています。

日本の援助というのは極めて高く評価をされています。実際、ウズベキスタンに経済協力ミッションが来られた際には、ウズベク側は最大限の対応をします。政府ミッションですと大臣とか第一次官が対応しますし、開口一番「日本の援助を高く評価をします。そして日本の援助に対して国を挙げて謝意を表明します」との発言があるのが通例です。

そういうことでウズベクに来られる方は、大体皆さんいい気持ちになって帰られて、「もっと援助をしてあげなきゃ」ということになるようです。世界の国々の中には、日本からの援助があることは一言も言わないという国もあるぐらいですから、その点、やっぱり援助のしがいがある国ということが言えるのではないかと思います。

それからもう一つ、我々が一生懸命やっている事業としては文化交流があります。その背景には、日本に対して強い親近感を持って、対日関心が高い。日本に学びたいという強い要望があります。茶道とか生花といった伝統文化のみならず、現代文化の紹介にも努めています。またタシケントにはJICAが運営している日本センターがあります。同センターには1ヵ月に5,000人以上が訪れます。いつ行きましても、NHKのテレビを見たり、インターネットでいろいろなアクセスをしたりするために、たくさんのウズベク人が

来ています。最近、ウズベクでも韓流といいますが、「冬のソナタ」を放送していますが、「何で日本のドラマを見せてくれないのか」と言われるぐらい、日本に対する関心が強いです。



タシケント国立法科大学

そして、そういう関心を背景に、私もできる限りいろいろな大学で日本について講演をさせてもらっています。外交は専門ですけれども、外交だけじゃなくて日本の政治、日本の社会、日本の文化、それから日本の国というのはどういう国か、日本人の性格というのはどういう性格なのか、いろいろなテーマでお話しています。最後に質問も沢山出ますし、本当によく真剣に聞いてくれます。ことしの2月から6月まで5ヵ月、毎月1回ずつ「日本大

使と語る会」というのをアレンジしまして、1回ごとにテーマを決めてレクチャーシリーズをやりましたけれども、毎回100人ぐらい来てくれました。いろいろな質問が出て、日本に対する関心の高さというのを感じました。

それとともに、引き続き日本語学習熱が高くて、今、ウズベキスタンでは1,600人が勉強していて、そしてどんどん増えています。タシケントでウズベキスタンの弁論大会を毎年行っていますし、それから今年は中央アジア弁論大会というのをやりました。中央アジアではやはりウズベキスタンが格段にレベルが高いと言えます。

ウズベクの若者の間では、今、日本というのは輝いた国といいますか、一番行きたい国ナンバーワンが日本、日本のことを勉強したい、そのために日本語を勉強したいという意識が強いのです。その中で、名古屋大学とタシケント法科大学とのプロジェクトについては、最近、法科大学の中に日本法教育研究センターが開設されましたが、引き続き日本語教育、それから日本法学習の拠点になるように我々としても支援させていただきたいと思います。

経済協力、文化交流はうまくいっているのですが、なかなかうまくいかないのがビジネス振興、観光振興です。これだけウズベキスタンは日本の方を向いてくれて、関係はいいのですが、他方、日本とウズベクとの間の人、モノ、お金の交流になると、極めて低調です。輸出・輸入合わせまして日本との貿易額は150億円ぐらいです。日本の総貿易額が120兆円ですから、いかに小さいか。主に日本はウズベキスタンから金(きん)を輸入しているのですね。ウズベキスタンにいる日本のビジネス関係者に、「もう少しビジネスの活発化をお願いしたい」と言うのですが、ウズベクから買うものがない、売るものもないと極めて冷たいのです。観光についても同様です。観光資源はたくさん、サマルカンド、ブハラ、ヒバとあるのですが、昨年一年間観光

を含めた日本からウズベクに来る旅行者は、大体3,000人から4,000人です。ところが去年1年間で日本から外国に出た旅行者は1,700万人。中国に行った人は300万人です。またウズベキスタンから日本に行く旅行者は、大使館でビザを出していますが大体1,000人ぐらいです。今、日本にきている外国人は600万人から700万人です。このように実態を見てみると、日本とウズベク間の人・モノ・お金の動きというのは極めて限定的です。これを何とかしなければならぬと思うのですが、最大の原因は情報不足です。日本ではまだまだ中央アジアのことはわからない。実際、多くの日本人がウズベキスタンという国はどこにあるのかということからまず始めなければならないという感じでしょう。それからウズベク側も十分にPRをしてない。情報社会の中で情報がないということでは関心が少ないのは当然です。ウズベク側も、努力はしているのですけれども、まだまだ外国からの投資を受け入れる体制とかビジネス環境が整備されてない。よく聞く話ですけれども、ちょっとビジネスを合弁で始めたりしても、初めはいいのですが、もうけ出したりすると税金が高くて全部そっちにとられたり、それから法律面でもまだまだ不確かで、そういう信頼に欠ける面がある。

特に日本の場合は、信頼社会で信頼ベースのビジネスですから、そういう信頼に欠ける国とはなかなかカントリーリスクが高いということです。そしてまた、残念ながらウズベキスタンというのは世界でもめずらしい二重内陸国という国です。ウズベキスタンと本格的に商売するにしても、どこから製品を出すか。飛行機は飛んでいるのですけれども、飛行機に大量の製品を積むわけにはいかない。鉄道で北はロシアに行けますが、日本へのシベリア鉄道は余力がありません。東は中国に行くがここも中国の需要で手一杯です。結局、南しか行けない。南の出口を何とかしなきゃならないのですが、アフガ

ニスタンの政情はいまだ不安定です。どこも大型のものを運ぶルートがない。地理的条件もマイナス要素です。

そういうことで、ビジネス、観光、今のところ不振なのですが、将来は、観光は有望と思われます。今年8月に小泉首相が来られましたが、やはり日本人にとってシルクロードというのは何となく行ってみたいところではないでしょうか。これから団塊の世代も定年を迎え観光に拍車がかかることになります。最近、NHKのディレクターが来られまして、「新シルクロード・シリーズ第2部」を制作中で、来年4月から放送するそうです。第1部で中国のシルクロードを放送したら、観光客が2倍になったと言っていました。敦煌とかあの辺はホテルも何もないところですけども、観光客が沢山来たようです。それからビジネスについても、今回、小泉首相の訪問の際、ウズベキスタンの方から、ウランのビジネスをやっていきたいと思いますという話があって、私もいろいろアドバイスをしているところです。ビジネス、観光とも現状は不振ですけども、将来、特に大手商社は今、グローバル・ビジネスをやっていますから、ロシアとかインドとか中国との関係で中央アジアにもうまい具合に商機が回ってくれば、ビジネスが伸びるのではないかと思います。

5. 小泉首相のウズベキスタン訪問

8月29日から30日に1泊2日で小泉首相がウズベクを訪問されました。これは日本と中央アジアの歴史始まって以来、初めての日本の首相の現地訪問でした。中国、韓国の首脳を含めいろいろな国から首脳が来ているのに、またこれだけ日本、日本と彼らが懂れているのに、これまで日本から首相の訪問がなかった。そういう意味で、私はすごく意義があったと思います。ウズベク側も大歓迎で、私も首脳会談に同席をいたしましたけれども、当初は30分ぐらいの予定が、延々と1時間45分にも及びました。お互い気が合った様子で、二国間問題、地域問題、国際問題と話が広がりました。カリモフ大統領からは、引き続き日本との関係を強化したい、日本はもっと指導力を発揮すべきであると述べられ、日本が国連の安保理の常任理事国になるのは賛成だ、日本は遠慮することはない、日本のプレゼンスを中央アジア、世界でもっと示すべきだ、日本のODAは高く評価している等々の前向きな話がされました。小泉首相からも、日本のODAを活用してもっと自由化、民主化を進めるべきである、ビジネス環境をもっと整備すべきである等々の話がされました。

私は小泉首相の訪問の後、欧米の大使を招いてブリーフィングをしました。やはり彼らが一番びっくりしていたのは、「よくあのカリモフ大統領と2時間近くにわたって対話ができましたね」ということでした。欧米の大使の受け止め方はやはり日本の首相だからカリモフさんも胸襟を開いて話し

た、真にウズベキと対話ができるのは日本だという反応で、私としても面目躍如でした。



アムール・ティムール像

6. ウズベキスタンで思うこと、考えること

最後に、ウズベキスタンで思うこと、考えたことについて述べたいと思います。

まず一点目は、なぜウズベキスタンを支援、援助するのか。まだまだウズベキスタンというのはどこにあるかなという意識が強い中で、なぜそういう国に援助するのかですが、やはり1つは、この中央アジアというところはまだまだ不安定で、放っておくとアフガニスタンのようにこの地域が不安定化し、混乱する可能性がある。そういうふうにならないように、ロシア、中国、アメリカ、EU、日本、それからインド、いろいろな国が、この地域が1つの国の影響力の中に入らない方がいいということで、国際協力をしましょう。そういう中で日本もしかるべき貢献をする。これはアフガニスタンもそうです。何で日本がアフガニスタンにそんなに支援するのか。これはやっぱり、アフガニスタンのテロ対策、これは国際的な課題です。イラクもそうです。北朝鮮もそうです。やはり今、国際社会が関心を持っている地域をめぐる国際協力には、やはり日本は関与すべきである。こういうことを通じて、やはり日本のプレゼンスがあれば、発言力というのは強まっていくということです。

それからもう一つは、やはりこのウズベキスタン、中央アジアが極めて親日的である。これは我が国にとって極めて大切な応援団になってくれるわけです。日本という国は、強力な応援団がなかなかいない。周辺の国もなかなか難しい国が多いものですから、一国でも日本のことを頑張れ、頑張れという応援団をつくっておく必要がある。そういう観点から、やはり中央アジア、

特に大きな人口を有するウズベキスタンについては、やはり援助していく必要がある。それから短期的には、我が国にとっての直接の経済的なメリットは、今のところは見出すのはなかなか難しいのですけれども、やはり資源を持っています。石油があり、ガスがあり、ウランがあり、銅があり、いろいろな資源があります。将来、南の方の出口が開かれるとすれば、日本にとっても重要な経済利益を持った地域になるという観点から、このウズベキスタンというのを援助する必要があると思います。

二点目は、ウズベキスタンにいまして感じるのですけれども、やはり世界にはいろいろな国があるということで、ウズベキスタンに来て、「ああ、こんな国があったのか」というような新発見をするところが多いのです。今、国連の加盟国が 192 ありますが、私が外務省に入ったときはそれこそ冷戦の最中でした。世界情勢もシンプルで、社会主義陣営と資本主義陣営を見ておけばいいのですけれども、今、ポスト冷戦の後は、もう世界に 192 の国があれば 192 の文化があり、言葉があり、民族がいるということで、そういう状況が紛争、テロを起こしているということですから、特に日本にとって、やはり日本の関心エリアというのをもっと広げる必要がある。日本はこれまでどっちかというと目を向けてきたのはアメリカ、ヨーロッパ、近くは中国、韓国、ASEANぐらいでした。私は、クウェートで勤務したときにはものすごくカルチャーショックに襲われました。イスラムの国というのはこんな国かということは、やっぱり夢にも思わなかったのです。そういう状況からすると、日本の今後の進むべき方向としては、複雑な国際環境、あるいは多様性を踏まえて、日本の関心分野をもっと広げる必要がある。そのためには、地域研究、それからこれまであまり関係がなかった国とも関係を広める必要があるのではないかと思います。そういう関係から、名古屋大学の

行っておられる法整備支援、ウズベキスタンとかモンゴルとか、これまであまり関係のない、日本では知られてないところとの関係強化を図る、これは極めて重要なシグナルを日本国民に送っておられるということで、極めて重要視しているところであります。

第3点目は、私はウズベキスタンにいて感じるのですが、日本のステイタス、これは日本人が考えている以上に今、ずいぶん上がって、日本への関心が極めて高い。日本人自身はそう感じないのですけれども、我々はあまり大国とは言わないですけれども、ウズベクの人にとっては、日本は遠慮することない大国じゃないと言われるのです。そしてまた、今までは経済大国、これは日本人もそうかなと思いますが、いまや、経済大国だけじゃなくて、それ以外の文化大国といいますか、世界の文明の中の柱の1つだというふうに見られています。ですから、日本のモデルを勉強したい、日本のシステムを勉強したい、日本人の考え方を勉強したい、そういうふうに思っている。また、日本は軍事大国だと思っている人はいないのです。引き続き軍事大国になるべきではないと思いますし、これはいいことだと思います。今まで日本人は経済大国ということでやってきたのですが、それ以外の、文化大国という1つのセンターになっているという意識は、日本人自身、まだまだ持っていないという感じがします。最近、「クール・ジャパン」という言葉があります。これは欧米もそうですけれども、日本のもの、これまでは生け花とかお茶とか歌舞伎とかそういうものでしたが、最近では日本料理です。モスクワには日本料理店が200店以上ある。カザフスタンにもある。タシケントにはまだないのですけれども。日本料理に対する関心、それからこれもよく言われますが、マンガとかアニメーションとか、それから日本のファッション、それから私もいろんなところで講演をしてウズベクの人から聞かれますけ

れども、日本のシステム、日本の社会がどういうふうに動いているか、そして日本の経済がどうなっているのか、日本の政府と民間がどういうふうに協力をしているか、そういう日本モデルを知りたいということなのです。日本モデルというのは、アメリカのモデル、ヨーロッパのモデルとは違う。私も一応、何となく説明はしているんですけども、あまり突っ込まれるとわからなくなるのです。

そういうことで、私は日本、あるいは日本人の課題というのは、そういう外国における日本に対する関心の高まりに対して応えていく必要があるのではないかと。それに対して今まで日本というのはあまり発信をしてこなかったという感じがします。どっちかという日本というのは、今まで日本の歴史を見ましても、中国とか欧米から一生懸命いろいろ受信をして日本の国を変えていくということはしてきましたけれども、自分の経験を外に広めるということはしてこなかったということです。あまり押しつけがましくしなかったのがよかったのですけれども、しかし他方、ウズベクあたりはもっと頑張り、頑張りと言ってくれるのですから、もう少し日本としては、我々の経験というのを外に示していくという、そういうことが必要です。そういう意味では私は法整備支援というのは、法整備のその後ろに日本人の考え方があるわけですから、それをウズベクに示していくのは極めて重要だし、そしてまた現在、多文化主義、マルチ・カルチャリズムと言われ、ウズベク人も言っていますけれども、欧米の文明というのは、これはひとつに過ぎない。だから参考にするけれども、それは全体ではない。今、いろいろな文明がある。アメリカの文明、ヨーロッパの文明、それから中国は中国、ロシアはロシア、日本は日本、だからこういうものを参考にしながら自分たちはやっていきたいということです。そういう中で、やはり日本としての文明的貢献といいま

すか、文化的貢献、こういうものをやるべきではないか。私自身、一応、心掛けてやっているのですが、残念ながら、ウズベク人からどんな本を読めばいいのかといわれると、あまりそういうことを書いた本はないのですね。昔、「ジャパン アズ ナンバーワン」とか何かありましたけれども、もう少しそういう面で、日本が発信をできればいいなという感じがします。

それからウズベク人からもよく言われるのですけれども、もっと日本はCNNとかBBCみたいに海外に放送をすべきではないか。タシケントの日本センターで毎日たくさんのウズベク人の若い人がNHKのテレビを見ますが、NHKのニュースを見ると日本のイメージが悪くなる。何であんな犯罪みたいなことばかり流すのか。NHKに聞きますと、やはりNHKの編集方針として、国内向けにやっているというのですね。日本の国民というのは、三面記事的なものは関心があるという話です。トップ記事に学童が誘拐されて殺されたとか、ああいうものばかりでしょう。ですから、やはりもう少しバランスのとれた国際放送、ようやく政府も最近、委員会をつくってやろうという話になっていますが、そういういいイメージをつくっていく。韓国はどっちかという日本より先に進んでいまして、ウズベキスタンのテレビでも「冬のソナタ」とか放送していますけれども、しかし、ウズベク人に言わせると、「冬のソナタ」はよかったけれども、それ以後は何を見ても同じに見える。やはり日本のものをみたいと言うので、そういうことに応えるべきだと思います。

最後の結論になりますけれども、私は、ウズベキスタンにいまして、私を含めて日本人自身、現状を踏まえて、日本の意識改革といえますか、特に対外的な関係については、もっともっと真剣に考えるべきではないかなというふうに思います。ある意味で北朝鮮の核実験というのはいい刺激になったな

という感じがします。そしてまた日本人がもっと意識を高めて、国際社会における日本の役割、経済のみならず外交面での日本の役割、それから文化・文明面での日本の役割ということをもっと意識してほしいと思います。そのためには、日本人の考え方、日本のモデル、日本のシステム、これについてもっとわかりやすく発信をしていく必要があるという感じがします。そのためには、やはり日本が欧米のことだけ知っている、中国のことだけ知っているのではなくて、もっと幅広く、中東のことも知っている、中央アジアのことも知っている、幅広いそういう情報を知る必要があります。自分の日本人としての考え方、意見を自分でまとめる必要があります。そしてまた、それを外国に発信する手段としては、やはり英語が必要になってきますし、それから英語のみならず、アジアでは中国語とか韓国語とかいろいろな言葉がありますが、これは極めて有効です。それからもっと重要なことは、外交というのは、何も外務省なり大使館がやるものではないということです。特に欧米は、もう官の外交、民の外交が入り乱れてやっています。まだまだ日本の場合は、外交は外務省に任せておこうという感じがするのですが、そうではなくて、官は官のルートで官の外交をやる、もっともっと民のルートで外交をやっていただく必要があると思います。その観点で、名古屋大学もまさに民の外交をしていただいているということで、極めて心強く思っている次第であります。

○司会

今日聞かせていただいた話は、日本からウズベキスタンへ出かける人が、行く前に聞かせていただければ本当に役に立つという話で、本当にありがとうございました。今日のこの会はこれで終わりということにいたします。



<著者>

楠本 祐一 *KUSUMOTO Yuichi*

1947年京都市生まれ。1971年同志社大学法学部卒業。同年外務省入省。英国、旧ソ連、クウェート、ジュネーブ等での勤務の後、外務省経済局国際エネルギー課長、ロシア大使館公使、OECD日本政府代表部公使、外務省欧亜局審議官、バンクーバー総領事、ハバロフスク総領事を歴任。2004年7月よりウズベキスタン大使。

CALE BOOKLET No.1

ウズベキスタンという国 国内・国際情勢と日本との関係

著者 くすもと ゆういち
楠本 祐一

発行 名古屋大学法政国際教育協力研究センター(CALE)
464-8601 名古屋市千種区不老町
電話: +81 (0)52-789-2325 Fax: +81 (0)52-789-4902
<http://cale.nomolog.nagoya-u.ac.jp/ja/>

発行日 2007年3月15日

印刷・製本 名古屋大学消費生活協同組合印刷部

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。

